

P-121 癌性胸膜炎を伴う肺腺癌の治療に関する臨床的検討

浜松医科大学第一外科

○鈴木一也、堀口倫博、杉村久雄、野木村宏、小林亮、富井明望、原田幸雄

目的：胸膜播種、および胸水細胞診陽性の原発性肺腺癌は、切除例、非切除例ともに予後不良であり、その治療方針は確立されていない。それら肺腺癌の切除例、非切除例につき臨床的検討を行った。

対象：1989年12月までに当院で癌性胸膜炎を伴う肺腺癌に対し、保存的治療が行われた22例（胸水細胞診陽性19例）、試験開胸に終わった11例（同6例）、肺切除（肺葉切除14例、部分切除1例、胸膜肺全摘1例）が行われた16例（同4例）を対象とした。

方法：切除例は、切除後肉眼的に播種が少ない場合は胸膜切除、播種が広範な場合は壁側、臓側とも電気メスによる焼灼を行った。手術例は全例術中に30分間抗癌剤で胸腔を浸し、閉胸後は保存的治療群と同様、抗癌剤の胸腔内、および全身投与を行った。

結果：保存的治療群は1年生存率20.0%、2年生存率13.3%、試験開胸群は1年生存率39.0%、2年生存率0%、切除群は1年生存率71.0%、2年生存率41.0%であり、保存的治療群と切除群、試験開胸群と切除群の1年生存率に有意差（ $p < 0.01$ ）があった。

結論：切除群は、N₀、N₁例が他群と比較し多く、単純に比較はできないが、切除可能な症例は、切除することが望ましいと思われる。

P-123 非小細胞肺癌例における脳転移およびその治療成績と予後

国立療養所近畿中央病院内科

○山本益也、古瀬清行、河原正明、荒井六郎、児玉長久、小河原光正、久保田馨、高橋安毅、内藤博道、有富聡

【目的】非小細胞肺癌例における脳転移の頻度およびその治療方法・成績と予後につき検討した。

【対象】昭和58年以降昭和63年末までに当院に入院した非小細胞肺癌例のうち、肺癌診断時、脳CTにて脳転移の認められた69例と、脳転移に対し30Gy以上の脳放射線治療を受けた81例を対象とした。

【成績】肺癌診断時脳転移陽性の69例の組織型別内訳は、腺癌46例、扁平上皮癌15例、大細胞癌8例であり腺癌および大細胞癌例に脳転移の頻度が高い様であった。脳転移症状は、69例中23例では脳転移発見時にみられたが、残りの46例中22例では経過中最後まで脳転移症状はみられなかった。脳転移の治療は、30例では脳照射が施行され、7例では手術が施行された。69例全例の中間生存期間（MST）は134日で、1生率は11.5%、2生率は1.4%であった。このうち脳単独転移例33例のMSTは163日と、多臓器転移例36例のMST109日に比し長かったが、有意差は認めなかった。また最終的に脳転移が死因となったものは69例中21例であった。30Gy以上の脳照射施行例81例では、4例を除き脳転移症状があり、うち45例で脳照射により症状の改善が見られた。また照射前後に脳CTの撮影があり効果判定可能な55例では、CR7例、PR22例、NC24例、PD2例、の効果であった。

P-122 脳転移で初発した肺腺癌の治療方針

都立府中病院胸部外科

○山本 弘、小林利子、大塚十九郎、井村价雄

目的：演者らは第24回の本会総会で、肺癌脳転移の手術成績を非手術例のそれと比較することによって、腺癌のみに、有意に開頭術の延命効果を認めることを報告した。今回は脳転移が初発症状だった腺癌の治療成績を分析することによって、その治療方針を確立しようと試みた。対象：最近10年間に、当科で経験した肺癌の脳転移例は78例（腺癌47例、扁平上皮癌7例、腺扁平上皮癌1例、大細胞癌7例、小細胞癌16例）で、そのうち脳転移で初発した症例は11例で、偶々全例腺癌で、且つ脳腫瘍摘出後に肺癌が確認乃至発見されたものである。原発肺癌に対しては、5例が開頭術後に肺切除術を施行され、6例が非観血的に治療された。

成績：平成2年6月現在で死亡例は9例で、うち肺切除例は3例で、残り6例は非開胸例である。死因は原発巣悪化が5例（全例非開胸例）、脳転移再発2例、全身転移及び自殺が各々1例ずつだった。そのMSTは14ヶ月であるが、自殺を除くとMSTを越えられなかった3例全例が非開胸例であった。MSTを越えた2例は非開胸例であったが（16ヶ月、20ヶ月）、72ヶ月と長期生存した1例は肺切除例であった。非担癌生存中の2例は、27ヶ月と32ヶ月で、いずれも肺切除例であった。

結論：脳転移で発見された肺腺癌に対し、条件が許せば、まずは開頭術を施行し、しかる後に原発肺癌に対する肺切除をすることによって、QOLの改善、延命効果、更には長期生存さえ期待出来ることが確認された。

P-124 転移性脳腫瘍で発見された原発性肺癌の臨床的検討

熊本地域医療センター 呼吸器内科¹、脳神経外科²、放射線科³、病理⁴

○中村博幸¹、柏原光介¹、深井祐治¹、千場 博¹、三浦正毅²、吉岡仙弥³、蔵野良一⁴

目的：肺癌経過中に脳転移の出現はしばしば認められるが脳転移症状で発見される事は稀である。最近我々は中枢神経症状を初発として当院脳神経外科に入院した原発性肺癌7例を経験したので報告する。

対象及び方法：最近5年間で当センター脳神経外科に脳腫瘍と診断され入院した原発性肺癌7例である。

成績1. 7例の主訴はそれぞれ片麻痺3例、歩行障害1例、両手のしびれ・目のかすみ1例、左上肢の脱力感・運動障害1例、意識消失発作1例であった。

2. 7例の転移巣数は1個2例、2個2例、数個以上3例あり5例では脳腫瘍摘出術を施工した。

3. 組織型は7例中腺癌5例、扁平上皮癌1例、大細胞癌1例であり腺癌が多い傾向がみられた。また原発巣と転移巣の分化度の差は殆どみられなかった。

4. 非小細胞癌の単発転移巣（場合により複数転移巣）では、脳転移巣摘出及び原発巣摘出により生存期間の延長を認めることもあり脳転移巣摘出術も考慮すべきである。更に多発性脳転移が認められた場合でも1個の転移巣が大きく神経脱落症状の主たる原因で他の病巣は小さく放射線・化学療法で増殖抑制可能な場合にも外科療法を考慮すべきと思われる。